

人間科学部創設時をふりかえる

— 創設の経緯と理念 —

浅井 邦二* 上田 雅夫**** 大島 康行* 嵯峨座 晴夫**
相馬 一郎*** 濱口 晴彦** 春木 豊**
野嶋 栄一郎*** (司会)

と き：1997年7月8日(火)

ところ：人間科学部第二会議室

百周年総合計画審議会

野嶋(司会) 本日は御多忙中のところお集まりいただきありがとうございます。この座談会は人間科学部創設10周年を記念して行われる座談会のうち、第1回目に相当するものです。学部創設時をふりかえていただきながら、創設の経緯や理念の形成過程などをお聞かせいただけたらと思います。それでは、座談会を始めさせていただきます。では、まず、上田先生からお願いします。

上田 100周年記念事業計画委員会のころからの人間科学部設立のいきさつを説明しておこうと思います。要綱によれば昭和52年の4月15日に評議員会で創立100周年記念事業委員会設置を議決ということになっており、浅井先生は文学部の選出の委員で、計画委員会委員になっていらっしゃいました。そのころ私は体育局におりまして、体育局選出の委員ということでこの委員会に入っていました。委員会は親委員会のもとに小委員会がありまして、私は小委員会の委員になりました。

それで、100周年記念事業として何をやるかということで、その当時はこの計画委員会には学外の委員も入っておいりましたので、広く学内外に計画のある人たちから意見を聞こうじゃないかということが提案されて、じゃそうしようということで、

何回かに分けて計画提案を求めたというようなことがございました。実はその前に浅井先生、それから相馬先生、春木先生、濱口先生、それから理工学部の先生もその委員だったですね。それで人間環境学部をつくろうということで長年努力をなさっておったのは知っておりました。ところが、これを理事会に提出しても一向に話は進みません。これは詳しくは浅井先生あたりがご存じだろうと思うんですが、理事会の方は、本庄につくるなら話は簡単に進んだのかもしれませんがけれども、東伏見をキャンパスの候補地などに挙げられた。そうすると体育局と利害が相反しますので、なかなか動かなかったようです。それで人間環境学部の計画案は理事の机の引き出しでか上だかにほりをかぶっておりました。

私は、皆さんが、人間と環境を一緒にした学部をつくるということは非常に意味のあることだと思っておりましたし、それから心理学が文学部から離れて出ていこうという意向を聞いておったものですから、それでは、この際100周年記念事業の計画案として再提案をなさったらいかがでしようかということで、本明寛先生と浅井先生にご相談を申し上げました。いきさつはいろいろありましたが、一応前の案がありましたので、その細部を審議していただいて、候補の一つとして

*早稲田大学名誉教授

**人間基礎科学科

***人間健康科学科

****スポーツ科学科

挙げるということになったわけです。

一方で、私の方は古くから体育学部をつくろうという非常に強い要求があったものですから、スポーツ・体育系の学部をとということで提案をいたしました。歴史的なことを少し述べさせてもらいますと、昭和24年に高等師範部が教育学部として発足しましたが、高等師範部時代にはあった国民体錬科は廃止されてしまいました。一方、新制大学では保健体育が必修科目に指定されていますので教場を新設する必要が生じました。体育各部・稲門体育会関係者は早稲田スポーツ再興の願望を強く持っていました。そこで体育局が中心になって「体育館建設のための募金と体育学部設立の為の要望書」が提出されました。大濱信泉総長はそれを受理して河野一郎氏を委員長にして募金活動が始められました。募金は順調に進みました。その基金によって記念会堂が建設されましたが、体育学部設置は見送られてしまいました。募金で集めた金が残っていたので体育局の校舎が建設されました。その後、安井体育局長時代にも体育学部設置を理事会に要請したのですが、受け入れられませんでした。この間昭和39年に教育学部・教育学科に体育学専修が設置されましたが。戦後一貫して体育学部設置の運動が続けられたにもかかわらず実現されずにいたわけです。そこで100周年記念事業案として提出することになったわけです。

いろいろ審議しました結果、結局人間環境系の学部、正確な名称は後で調べていただきたいんですが、それと体育・スポーツ系学部両方を100周年記念事業に入れるということに合意が成立いたしました。

それで、評議員会でも54年10月15日にその2学部を100周年記念事業の項目にするということで、募金に取りかかったわけです。ところが、このころ、ちょうど変なぐあいに体育系の不祥事が連続して起こりまして、金を集められないというような、募金の出ばなをくじかれるような事件がありました。これだけではなく、もともと体育系の学部に対しては学内ではかなり抵抗があったことも事実です。これは後でいろいろ調べると、戦時中、東久留米にありました練成部、練成道場時代にいじめられた先生方の怨念がありまして(笑)、浅井

先生なんかもその口なんですけれども、これがもう絶対ああいふのは早稲田が二度とやってはならない、その母体になるような体育はまかりならんということ。

野嶋(司会) 私なんかの時代にはわからないんですけど、その練成部というのはどういうものだったんですか。

上田 これは後で浅井先生に聞いてください(笑)。私も知らないです。ところが、私はその怨念だけを聞いてまいりました。一応委員とか役職についておられる方たちは練成部でいじめられた方たちが主力になっておられたものですから、体育の復活に対しては非常なもうアレルギー反応に近いものがありました。

浅井 練成部は私のところぐらいからでしょう。

野嶋(司会) しかし、それは部というからには、体育会なんですか。それとも、学部に近いものなんですか。

浅井 学部というより学生部に近い組織です。

(註：学徒練成部に関しては早稲田大学百年史第三巻 P.946～968 に詳しい)

相馬 戦争中のものだ。

野嶋(司会) 軍人を養成するための組織だったのですか。

上田 軍事教練もやりながら、教練は教練でまた別なんです。むしろ人間形成を目的にした非常に評判の悪いものだった。その当時は、早稲田大学は大政翼賛会的な思想が基本的にありますから、富国強兵に努力したようなんですが、その怨念がありまして、体育系の学部に対しては非常に抵抗があったんです。それがやっと小委員会から計画委員会を説得して、やれやれと思っていたら、運動部をめぐる入試の……。

野嶋(司会) それは何年でしたか。

浅井 昭和57年にはもう百審、百周年総合計画審議会ができていますから、その前ですね。

上田 その前ですね。54年に決めて募金を始めてからですから。そのところで、一つは入試漏洩事件。その翌年は商学部の成績改ざん事件というのがあって、もともと体育に対してアレルギーがあったところへそれが重なりまして、100周年記念事業そのものをもう一度見直せという意見が非常

に強く出てまいりました。それで、昭和57年に百審というものをつくって、このときは学外の委員を入れるとおかしくなるからというので、学内の委員だけでいわゆる百審をつくって、事業の洗い直しをしようということになったわけです。

野嶋(司会) それが本当の出発だったんですね。

上田 ええ。それで、本来ならば2学部で出ていったんですが、そういう意味で百審のところではいろいろと協議していただいて、あのころは春木先生ももう入っておいりましたね。

野嶋(司会) 相馬先生も百審というのにはお入りになっていたんですか。

相馬 いや、百審には入っていません。

野嶋(司会) では、この話は浅井先生に引き継いでいただきましょう。

浅井 この早稲田フォーラム、No.59,1989に『人間科学部の誕生』というタイトルで私が書いているところがあるんですね。昭和48年というんですから、1973年ですけども、そのときに文学部の心理学、社会学専修の教員、それから理工学部の一般教育の人たちで人間環境学部（仮称）構想というのが始まったわけですね。そのとき、かなりいろいろカリキュラム等も考えたんですけども、そこに書いてあることと、今人間科学部になってから言い出していることと同じことがやっぱり書いてあるんです。

野嶋(司会) そこに書かれていることは当時としてはすごく斬新な考えだったのでしょうか。

浅井 これを見ると、現代社会における科学技術の急速な発達と社会・産業構造の激変の結果として、さまざまな問題が出てきたと。人間の生理・心理・社会環境を組織的・統一的に把握することが必要だというので書いてあるんですけども、ただ、このときの構想には生物・生理学は入っていないんですね。というのは、そこまで話を広げても、気持ちとしてはあったんですけども、広げてできないと悪いからというので、まず心理、社会、それから理工学部の一般教育の人でやり出したんです。

相馬 それで、たしかそのとき建築の話もありました。

浅井 はい。そのうちに、ここに社会工学的なところの人をとということにも……。

野嶋(司会) あの当時は行動科学全盛時代ですね。

相馬 本庄に展開するときに、建築は広いところが欲しかったので、本庄の展開までも念頭に入れると、建築や何かが積極的に乗るというような話もあったんです。

野嶋(司会) ということは、このキャンパスをつくるときも本庄は念頭にあったんですか。

相馬 いやいや、前の人間環境学部のときも本庄は一つの候補地で、だけど、最終的にはそんな遠いところは嫌だという話になって、東伏見になったと思います。

上田 それはむしろ大学の立場からいくと、本庄を買っちゃったけれども、何もつくらない。だから、あそこですつづてくれるなら、大学はそれに協力しようということだったんですけども、今相馬先生がおっしゃったように、あんな遠いところは嫌だと言ったから。

春木 本庄で今思い出したけれど、本庄の問題というのは戸川行男先生が常任理事をやっていたところ、一般教育、教養部というような感じの計画がありましたね。

浅井 そうです。まずそれがありましたね。

春木 ありましたね。あれは大分前ですものね。

相馬 それから、予約金を取って何とかするか。子供が生まれたときに予約金を取ろうというわけだ（笑）。

春木 卒業生の師弟を集めて……。

浅井 中学、高校の成績を調べて、それがどのぐらい予測性を持つかというような研究をやっていたことがあるんですね。要するに、中学のときに予約しちゃうわけですよ。もう授業料を払っていくわけですね。ミシンの販売方式と同じだというわけ。それが非常に評判が悪くて、殊に組合から何だというわけですね。その当時としては100万ぐらいかなんかでしょうけど、それで立ち消えになっちゃった。あれもかなり教養部としてのカリキュラムはできているんですね。ところが、戸川先生という方はそういう構想をつくることは好きなんだけれども、実行になるともう知らないよとい

う方なんですよ。それで消えちゃいました。あれは大濱信泉先生の時代ですね。だから、本庄キャンパス案というのはそこに一つあったわけです。それで、我々のときにもその案は資料としては来ていました。

我々が出したのは昭和48年7月に最初の案を出して、そして、その後も49年2月、50年7月というんですから、村井資長先生のもとに出しているんです。その辺のところまでですね。本庄を使うならともかく、本庄は嫌だと言うならとてもじゃないというわけで、文学部でも、皆さんがいいところへ行くなら送り出しますよというようなことを言っていましたね。それで、そのまま立ち消えになっちゃっていて、100周年になったとき、昭和52年に先ほどの話で事業計画委員会が発足した。やれ医学部をつくれだ、何学部をつくれだと方々あちらこちらから来たわけですね。そのときも我々としては、上田先生のところのスポーツはちょっと別として、もうだめだというわけで、余り乗り気じゃなかったんです。

野嶋(司会) それは前のことがあったからですか。

浅井 そうです。既に棚上げになっているし。しかし、せっかく何回も集まって案ができていたんだから、一番上の表紙さえくっつけばそのまま出せるじゃないかというわけで、だから表紙の一番上に本明先生とかの名前を載せたやつをそのままちょっと出していたわけです。

上田 その点は私、人間環境学部の構想というのはその当時は非常に新しい構想ですので、非常に気に入っていたんですよ。だから、本明先生と浅井先生をむしろ積極的に説得して、それを出していただいたといういきさつなんです。

浅井 出したところが、いろんなのがあったけれども、実現性ということから、やはり学内に何か芽があって、ちょっとテコを入れればできるといふようなところが結局残っちゃったわけですね。その辺のところは私はタッチしていないんですけど。

上田 そのいきさつは、私は小委員会で随分議論いたしました。水産学部とか、農学部とか、海洋学部とか、もういろんな構想が出たんです。そ

れなりにそれぞれおもしろかったんですけども。

浅井 そんな形でできて、やや控えめだったんですけども、後ほど大島先生などのお話に出てくると思うんですが、この場所がだんだん決まってきた、あるとき(54年7月)に社会学、心理学の先生をみんな新宿の三井かなんかのビルの部屋に呼んで、本当にやる気があるかどうかと。

野嶋(司会) どなたがお集めになったんですか。

浅井 理事(勝村先生)の方ですね。それでどうなんだということで、やる気があるならさらに進めるけど、やる気あるかどうかというので、みんなが集まったときに、条件を整えばやってもいいんじゃないかというオーケーを出したんですね。それでもう完全に100周年の中に入っちゃったわけです。そうこうしているうちにそれでどんどん進んで、新キャンパス小委員会というようになってきたんですけど、我々としては、前の案とは別の案をつくらうという気持ちが強かったんですけども、どうしてもほかにタネがないものだから、あれがやっぱりもとのたたき台にならざるを得なかったんです。そうしているうちに私も小委員会の委員長かなんかに、これもなるつもりじゃなかったんですけども、なっちゃったんですよ。なっても、まだ割にクールに対応していたんです。

野嶋(司会) クールといいますのは。

浅井 クールというのは、いつからやろうということ本部はもう決めてしまっているんです。こちらの委員長としては、じっくり議を経てということで冷静な態度でやっていたんですけども、小委員会の中でも初め反対している人もだんだん割に賛成の方に変わってきてしまって、それで結果的には全体会議でもそれを取り上げるという形になってきたんですね。

野嶋(司会) それが新キャンパス小委員会ですか。

浅井 そうですね。

上田 それは百審になってからです。

浅井 なってからです。百審の中にできたわけですよ。

さらにそうこうして、いわゆる新学部の設

立準備委員会ということになってきまして、そのころからはもう大島先生などもいらしゃった。

野嶋(司会) そうすると、その段階で生命科学を包含したような案はできてきたわけですね。

相馬 どのようなものをつくるのかがある程度具体性を持ってきたのは設立準備委員会のちょっと前ぐらいでしょうね。

春木 医工学関係の話はどの辺で出ていたんですか。割に早い時点ですかね。

浅井 百審以前だ。

春木 百審以前になりますかね。

上田 計画委員会の中でしたか。

相馬 それで、その流れが人総研につながっていく。要するに人総研をつくるのに医工学的なものを絡めたらという考えが生じてくる。

上田 そのいききつは、校友からは医学部をつくれという非常に強い要求があったんです。私は、研究・治療設備は募金でつくったとしても2〜3年もたてば古くなって陳腐化してしまうし、当時どこの附属病院でも行われていた差額ベッド料等は早稲田では認めないような風土がありますし、看護婦問題と考えると、もっと早い時期ならともかく今早稲田が医学部をつくる状況にはないと考えていました。むしろ健康科学に移行すべきだということで、医学部には反対しておったんです。ところが、この医学の研究というのは理工学部にいっぱいありまして、やはり健康をやるにしても、医科学の研究というのはせめて芽だけでも残しておく必要があるんじゃないかということで、総合医科学研究センターというのを置こうということになった。

それで結局評議員会では、人間科学系学部と、体育・スポーツ系科学部と、それから総合医科学研究センター、3つを事業項目にして募金趣意書をつくって、これはもう外部にも発表して募金を始めたんです。ところが、さっき言ったようないききつで、そのまま募金が継続できない事情が発生した。学内の意見もあって、それで再審議しよう。それでできたのが百審なんです。

浅井 それが昭和57年。

上田 百審になってから浅井先生は、いろいろ審議の結果、2学部を1学部にまとめて検討しろ

というその委員会の小委員長になられたわけですね。

それで、生物が入ってきたのは、百審のもとの100周年記念事業計画のときではなくて、その百審に移る過程の中で、これは理工学部と教育学部の生物の問題がまた別に発生しておりまして、それを取り込んで人間科学をもっと広げていこう、生物学も取り込んでいこうということで、百審にかかるときには生物学科も一緒になったんです。だから大島先生もいらした。

所沢キャンパスの環境影響評価

大島 その問題については、実は最初、浅井先生がおっしゃったように心理・生理・社会というのがあって、心理というのはまさに生物学の問題が非常に大きいだろう。だから、生理を広く考える場合にはやはり生物学を取り込まないといけないんじゃないかという声が出てきて、それで、じゃ、おまえ入れということで私が入ることになったわけです。実はそれ以前に、ここはご存じのように「狭山を守る会」というのがありまして、この場所に学部の設置をすることに対する反対運動が起こり、埼玉県がここを認めるに当たっては、まだ当時県には環境影響評価条例はなかったんですけれども、大学自体で環境影響評価をしろということで、大学に埼玉県から申し入れがあったわけです。実は大学の方ではだれにお願いしようかと、大分困っていたようです。この時から少し前に本庄校地の整備計画であそこへ運動場やその他の施設をつくることになり、緑を残しながらどういうふうに計画を立てたらいいか検討していました。そのときにたまたま私に白羽の矢が当たりまして、その調査を大学院の人たちの協力を得て調査をした実績を持っていたということで、当時常任理事だった西原春夫先生が私のところへ参りまして、ここの調査をやれということで調査を始めたわけです。

ところが、調査をして、それを出せば自動的に認めるということを埼玉県が言っていたんですが、保護団体の反対運動が非常に強くて、それで、やはりほかの他府県でやっていた影響評価条例に倣って審査をするということで、急遽埼玉県の中に

影響評価審議会というのができて、そこで審議をすることになったわけです。

野嶋(司会) 大島先生、途中でですけど、もうその段階でここの地域にキャンパスを建てる事に対する反対は結構強かったんですか。

大島 物すごく強かったです。

野嶋(司会) 折衝の相手というのは。

大島 ええ。県と、それから「狭山を守る会」と三者の検討会をやった。とにかく県の方はかぶるのが嫌なものだから、お二人さんでやってくれということでみんなげたを預けるわけですね。県が認可をするんじゃないかと随分言ったんですけども、なかなか県が言を左右にして動かなかったというところがあった。ようやく影響評価書ができ上がって、今でも覚えているんですけども、元の建設局のあった9号館の一室を借りまして、約2週間ほとんど徹夜で書き上げて、それで影響評価書をつくりました。ところが、それを活字にして印刷すると製本費が非常にかかるということで、当時ワープロが出たばかりでワープロで打ち上げて、図は手書きの図をつくりまして入れて、それをコピーをしまして、それで製本させて報告書をつくったわけなんです。

野嶋(司会) 提出先は埼玉県ですか。

大島 提出は埼玉県で、埼玉県はそれよりも約2ヶ月前に影響評価の審議会をつくって、仮の影響評価制度をつくって、それに基づいて審査をされました。いくつかの点でクレームがついたんですけども、一応審査が通ったわけです。

ところが、私、書類を書き上げてから、モスクワ大学の交換で1ヶ月程参りました。そのために校正を僕が見ることができなかった。それで幾つか校正ミスがありました。県庁のそばの埼玉県の県民会館ということで公開討論会をやりまして、それを突かれましてね。例えばアカガラがアカゲラになっていたり、アカゲラなんていないという話だとかね。もうひどい話になって、昼から夜の9時まで公開討論をやった覚えがあります。そのときの司会は濱田泰三さんがやっていたんだな。それで、まあ何とか……。

濱口 しかし、9時までかかったんでしょう(笑)。

大島 9時までかかった。それで、影響評価書の内容を知っているのは私しかいませんものでしたから、私がほとんど、向こうは二十何人次から次で、大奮闘した。そのころは、新聞社は勝手に向こうの言い分だけ聞いて悪口を書くということで、埼玉版は私の名前が挙がって随分悪口を書かれた覚えがあります。

それから、もう一回やろうという話があって、それでこの次は所沢の三ヶ島でやろうと主張しました。結局やらすじまいで影響評価書が通ってしまって、ここが決まった。ただ、そのときに条件がついて、B地区は改めて考えるということ。

野嶋(司会) もうそのときからA地区、B地区とあったんですか。

大島 はい。それからもう一つは、その後で夜間照明が決まったんですね。評価書に夜間照明の鉄塔の設計がなかった。それが尾を引きまして、あれは結局最終的に切ることになったんですね。そんな問題があった。

野嶋(司会) そういう形で一つ一つ乗り越えていって、それで今、生物系の参加という姿があるわけですね。

大島 それで、昭和58年に第1次計画に関する諮問が百審に出されて、それで人間科学部と人間総合研究センターができるということになって、その設置準備委員会ができた。

設置審との折衝

相馬 そのときは人間総合科学部でしたね。

大島 うん、人間総合科学部。

野嶋(司会) 昭和60年にその書類を提出したときは人間総合科学部で出したんですか。

大島 そうです。

相馬 それで、認可にならないから後で訂正したわけです。

野嶋(司会) そのだめな理由というのは。

大島 文部省が、3つの学科で何が総合だというのが設置審の委員の大学、特に九大の学長をやっていた医学部の先生で石田さんとかいうのがすごい反対して、医学系が入っていないのに何が人間総合科学だという反対が起きて。

相馬 それと、その言われたとおりにやると東

大の教養部みたいのをつくらなきゃいけなかったんですよ。哲学から何から全部入れないと総合にならぬと言うんだもの。

上田 哲学を入れるには、致命的に足りない。

相馬 そうすると、東大の教養部は医学部が別にあるからいいんだけど、あれぐらいのスタッフを集めてやらなきゃいけないとなると、とてもじゃないけどそんなことはできない。

野嶋(司会) 最初は小さな世帯からスタートして徐々にというような、そんなのは説得にならないんですね。そのときに必要条件を満たしていないといけない。

大島 私がこの設置準備委員会に入ったのは、おまえは所沢を一番よく知っているから、おまえが入っていないと動かないよということで、たまたま生命科学が入っているので、その代表として入れと西原先生に口説かれまして、最初は渋々入った覚えがある。

浅井 名前でもう一つひっかかっているのは学士号ね。これは影響するんです。今のような空気がちらちらあったにもかかわらず、まだ文部省は、規定が変わらない限りは現行の中の何かをとっているわけでしょう。

相馬 それでカリキュラムをすごく変えさせられたところがあるんですよ。社会学士というのを出すためには、ある幾つかの条件がなくちゃいけないというのが向こうの言い分で。

浅井 それが1年から2年の間に変えさせられた大きな理由です。

相馬 だから、社会学士に合うような科目を設置せざるを得なかったところがある。

上田 その点をもう少し細かく言うと、準備委員会のときはかなり浅井先生が丁寧に委員会で審議して、人的な構成などもやっておられたけれども、学士号絡みのときは待ったなしでやるものですから、ほとんど即決主義で。

浅井 これはまたずうっと反対していたんですね。社会学士とつけると、社会学系の方から、スポーツが入っているのになぜ社会だということになる。体育系の方は、今までみんな体育学士でやってきたのがあれが何が体育だと、両方から文句を言うてくるんですね。こちらとしては本当は何

も社会とつけたくなくて、人間科学とつけたいんだけど、できないから、しょうがないから社会にしているだけの話で。その方は社会で呑むから、総合の方は外そう。どっちも嫌だと言っていたらひっくり返るよと言って脅されたりして。

それで、これが表面に出てこないんですね。文部省へ行くと「いや、何か委員の方がおっしゃっています」とかなんとかという言い方をするでしょう。西原さんが向こうで聞くと「いや、別に」とかなんか言って、西原さんのところへはそういう反対が余り聞こえてこないんです。当人には余り言わないんです。しかし、周辺からは、早稲田はちっとも言うことを聞かないという情報も入ってきてね。しょうがない、どっちかというわけで、じゃ“総合”を削るかということになっちゃった。そのかわり社会はということで。社会にすると今度また今のように、スポーツにもスポーツ社会学ですか、何かそういうものをみんな置き置きという形になった。

上田 ここの学部をつくるときは、文部省の設置審の矛盾がもう極限に達しているときでした。これができてから設置審もかなり自由化しました。

大島 それからもう一つは、最初つくりましたカリキュラムは学科別の縦線がなかったんですよ。それで、学部共通で特に2年まででしたか。2年までは縦の線というのはほとんどなかったんです。

相馬 基本的には相互乗り入れを物すごくして、本当にそれぞれの最後の専門科目のところだけで初めて分かれようという発想だったんです。ところが、それを文部省に持っていったら、わからないと言うんだ。だから、どこまでこの線が入っているんですかと言われてね。

春木 最初は本当は1学科ということでしたね。

浅井 言ってもわからないから、縦に線を引いておけと。

相馬 これだと1学科になっちゃうよという発想なんです。

上田 学科の特性をはっきりさせるために、それぞれに特有な科目をふやせということで、それをやってきたら、だんだん下まで分かれちゃったんです。

春木 本当にそれは一つの特色だったと思って

いたものね。自由コース制で、自分でコースを決めて勉強する。それはすごく希望したんですけどね。

浅井 あれは2年目の申請のときにもう完全に線を引かれた。

春木 3本線を引かれちゃった。

相馬 いや、僕はそのときに文部省に行ったけど、言っても入れられたものね。

濱口 浅井先生、学士号は当初人間科学士ではなかったんですね。4年間でしたか。

相馬 最初の年だけ社会学士でした。それで、後は途中で人間科学士に変わったから。

嵯峨座 社会学の先輩の方々からおかしいと言われましたよ。文学部の社会学専修では文学部学士ですからね。それで、こっちは社会学だけでなく、心理学、生物学も教える。やはり、社会学という学士号はちょっと変だと思いましたよ。

野嶋(司会) 本当に幾つものバリアを碎いて碎いていく感じですね。その先に何が出てくるかわからないという感じがなんだ。

体育スポーツ学部と人間科学部

春木 これは上田さんに話しておいてもらった方がいいんじゃないですか。最初は2学部だったでしょう。要するに体育・スポーツ学部と、もう一つ人間科学部。あの辺が一つになっちゃったといういきさつね。ただ金だけの問題なのか、その辺がどうなのか。

上田 いや、金じゃなくて、さっき言ったような、むしろこれは歴史的な経緯を含めて、体育についての根強い反対があったと言った方がいいだろうと思います。

それからもう一つは、母体になるのが体育局と教育学部の体育専修だったんですが、両方とも文部省のある意味では設置審の審査が要らない組織なんですね。ですから、その教員構成のところでも審査を通るかどうか非常に懸念されたわけです。

さらに、学内は学内で余り賛成していないところがある。だから、体育・スポーツ系の学部はもうやめろというような意見も百審のところに出てきたわけです。ところが、それは困るんですね。本当にやりたかったんです、こっちで。浅井先生

の方は嫌々ついてきたんだから(笑)話が違うと言う。どうにかして一緒にやる工夫をしろと。それで、私が言うとあからさまに反対する学内の委員がおりますから、これは私も練成道場あたりのことを考えると仕方がないかなとも思う。それで、何とかして人間科学というものに統合するということで、これは春木先生なんかにも随分知恵をかせてもらったんですけども、今の基礎科学を頭につけて、応用編を健康とスポーツにするということで、2学部だったものを1学部にした。

ところが、今でも私はやはり無理があったなと思っておりますのは、スポーツ科学の方は実技指導という部分がついていきます。これについての対応が十分にできていないんです。これは入試の問題も絡みまして、その点が非常に1学部にしたおかげで矛盾が発生した。ところが、そのときはそれにこだわると学内でつぶされることがあったものですから、それは体育局的先生方の中には学部でなきゃやめろという意見もありましたけれども、私はやはりスポーツ科学というものをこの機会に確立しておかなければだめだと思ったものですから。

野嶋(司会) 先生、先ほど体育・スポーツ学部みたいな、そういう表現を使っていらっしゃるのですが、この辺の表現に含まれるニュアンスは。

上田 あれは、このフォーラムの寒川さんが書いていれるところで、私はずうっとスポーツで通ってきています。もともと非常に強い選手をつくりたい。私自身は、速く強く高く飛ぶやつはそれだけで価値があると。そのための科学研究があってもいいじゃないかということを常々主張していたものですから、それには早稲田でなければ、歴史的な背景がありませんので、これをぜひ早稲田でやろうということでやった。

体育学会の理事やなんかでも、その当時、寒川さんが書いているように、体育という名称からスポーツへ変えようという学会内の要求がいっぱいあったわけです。ところが、文部省を初めいろいろな抵抗があってなかなか変わらなかった。それで、私は早稲田はスポーツ科学でいくんだと言うと、そういう人たちは応援するから、早稲田を突破口にしなければ、スポーツという名称の学部学

科はできないからということで後押ししてもらったいきさつがあります。

野嶋(司会) スポーツ科学そのもののスポーツ・サイエンスというのは、もちろん人間科学部以前からも確立されていたわけですね。そうでもないんですか。

上田 いや、名称は日本では体育科学と言っておりましたから。

野嶋(司会) 国際的にはどういうふうに。

上田 国際的にはスポーツ・サイエンスです。体育というと非常に限定されたものになっておったんですけれども。

そういうことで、私はスポーツでいこうと言ったんですけれども、これもまた学内でも教育学部体育学専修というのがありましたから。

野嶋(司会) そうですね。教育学部は体育学専修でしたよね。先生のおっしゃっているスポーツ科学の志と体育学はかなり大きく隔たっているものでしょうか。

上田 教員免許がつかますから、ですからやっぱりスポーツとしてしまうのには抵抗を感じられる方もいたと言った方がいいと思います。今いらっしゃる人たちは別ですけども、昔はもっとほかの人たちがおりましたから。

大島 我々より年配の先生方は「体育という授業がある。教員になったときに中高の科目は体育だ。だからスポーツではないんだ」と。体育の教員を養成するためにはスポーツ選手じゃ困るということ。

相馬 体育の教員を養成するんだから。基本的には体育専修というのは教育学部にあるんだから。

野嶋(司会) ですが日本の教員養成のシステムは開放制ですから、スポーツ科学でも体育の教師の免許は出るわけですね。

濱口 上田先生の今の話の初めには2学部構想があって、それが結果的に1学部になりますよね。その100周年記念事業の大きな2つのものは、一つは新学部、一つはいわゆる学術情報センターでしょう。あそこの跡地利用という問題が絡んでいて2学部構想がだめになり、むしろ1学部でともかくという、そういう跡地利用という問題が絡んでそういう圧力はなかったんですか。

上田 跡地というのは安部球場ですか。

濱口 安部球場のことです。

上田 いや、それはありません。安部球場はまた別なんです。土地問題は早稲田はいつも大変なんですけれども。

浅井 大義名分としては、全学部を納得させるには、安部球場にはどうしても図書館が欲しいと。そのためには、あそこの野球場を所沢に持っていかなきゃいけないんだというのが表はそうでした。そんなことじゃなくて、図書館は何とかどこかにつくれば、すぐでなくても何とか済むじゃないかという発言があったんですけれども、結局はだめだと。それじゃ、人間科学部を認めてやろうかというような方を。

野嶋(司会) え、人間科学部の設置は学内ではそういう論理で認められたんですか。図書館があそこに必要だから。

相馬 いや、そうじゃないんだよ。そうしたんだけれども、実際には来なかったんだ。というのは、だから要するに早稲田大学というのは、いつも約束すると大抵約束が変わるんだよ。それで、一遍約束しても、いざ動き始めるとなると嫌だという話になって、それでどこか土地をもう一遍。これはもう理工総研もそうだし、あそこのテニスコートの場合も多分そうだったし、それからプールもそれに近いことがあるし。

簡単に言うと、一遍契約を結んでも、対象の相手がかわっちゃうとひっくり返るということがよく今まではたくさんあった。

浅井 最後のところを煮詰めないんですね。結局、日本人みんなそうかもしれないけど、日本はイエスカノーかでやってこないでしょう。まあまあというわけで何となくお茶を濁してきて、さあ最後は何かはいと言ってくれるだろうというふうな式で進んでいっちゃうんですね。いざとなるとやっぱり嫌だというようなことで、所沢なんかには野球場を持っていられないよというようなことですよね。それからまた1年ぐらいたつ。

上田 そういうことで色々な紆余曲折がありましたし、それから体育系に対する歴史的な背景を含めた抵抗というのがかなり強かったことも事実です。

人間総合科学部の理念

浅井 3つの学科の縦割りとか何かそういうのも、やっぱり今にもつなげてくる一つの歴史的な問題ですね。本来はもっと緩やかに3つの学科を余り区別しないという発想がそういう形になってきたということですよ。

野嶋(司会) とにかく“総合”という言葉にあったように、できるだけインテグレートしようという思想は、しかし今もずっと残っていると僕は思いますね。

上田 人間総合科学部にしたときには、なるべく融合させようという努力はかなりしたんです。

浅井 設置審の方へ人を出さなきゃいけないから、この人は研究だ、あの人は何とかだというふうに分けて出さざるを得ないんですよ。

相馬 だから、もう5～6年おくらせて出したらできたんだと思う。最初の構想どおりで行ったんだろうと思うんだけどね。

上田 5～6年後だったら100周年じゃなかったから。

相馬 でも、あれは遅れてもいいんだ。

上田 実際はおくれたけれども、100周年だからやるということだったので、でなければ恐らく学内の意見はまとまらなかったですよ。

嵯峨座 先生方はいわば設立の志に燃えた張本人ですよ。その方々と私はちょっと立場が違って、もう少し後から加わったので見方が多少違うところがあるんです。“総合”というのが落ちたということが今まで相当尾を引いているということはあるような気がするんですね。先生方が今のお話のように苦勞をして、そういうやむを得ない事情で落として学科の間に縦の線を入れたわけですね。その事情が、必ずしも後からこの学部設立の段階に入ってこられた先生方に当初の志が伝わりにくくなって、だから学部ができたときに意外に学科間の対立意識があったように思うんです。あっちの学科のためにどうしておれたちが授業をするのかというふうな、そういう気持ちを先生方に植えつけた。今はそれが元に戻ろうとしているから結構なことなんだけど、そういうふうに“総合”というのが取れたということがずっと尾を引い

ていたことは確かですね。

野嶋(司会) そうですね。それは我々の中にも実感としてわかりますね。

大島 特に人間科学というのは基本的にはマルチディシプリナリーな学問だと思うんです。それで、春木先生が「ヒューマンサイエンス」に書いて、マルチディシプリナリーというのは、それぞれの分野でそれぞれの研究をして、それを総合するのではなくて、お互いに共同して新しいものが出てくるのが本当のマルチだろう。そういう意味では、春木先生のここに書かれたことと僕はちょっとマルチが違うんだけれども。

相馬 だけど、最初の段階は春木さんが書いたように言わないとみんな何をやっていいんだかわからないわけよ。だって、要するに來た人がみんな人間科学の専門家という人はだれもいないんだから、それぞれの専門を持ちながら、例えば社会学の方は社会学のご専門を持ちながら來られているわけだから、そうするとそこをスタート点にしない限り、マルチだとかいって何かやろうなんていったって、それはちょっと無理だ。だから、やっぱり最初はそれぞれの専門領域に立脚しながら、それがどう相互に関連し合っ、その中からまた新しいものが出てくるという過程を最初とはらざるを得ないわけです。

野嶋(司会) 一番マルチな宿命を担っているのは健康科学のような気がするんですけども。

相馬 いや、すべてそうですよ。だからキーワードとして、それは僕は大学院のときがキーワードになると思うので、生命科学というのは新しい概念でやっていこうと。生命科学というのは社会学まで全部入れた概念なんですよ。もう一つのキーワードは健康ということで、これはスポーツから何からやっぱり全部入ってくる。大学院のキーワードは生命と健康ということになっているので、そういう意味では、健康だけがマルチなことをやっているわけじゃなくて、例えば基礎だって、それこそ生命ということがキーワードであるとするならば、非常に大変な作業だと思うんですよ。生物と、社会学と、心理学がどうやって学部の理念に沿ってやっていくのかということとは、それはそれなりの悩みがあるし。

浅井 生命科学というのは設置審で猛烈に抵抗するんです。

野嶋(司会) 生命科学の内部構成がですか。

相馬 そうじゃなくて、生命科学というコンセプトなんです。我々が言ったコンセプトと向こうの審査員のコンセプトが違う。それを強引に飯野先生がこっちのコンセプトに持っていったわけ。

大島 飯野さん、東大定年前に心筋梗塞をされましたので、心臓を心配した。

上田 スポーツ科学に話をもどしますが、百審の中での小委員会段階での議論の中に、実はスポーツ科学というのはもともと総合科学ですから、それはそれで、スポーツをやっていくためには人間科学をこのままスポーツ科学と名前をつけたいぐらいの認識で私はいたんです。それでスポーツ科学部案を出したんですけれども、とにかく体育・スポーツ科学に対しては、その学部をつくるのはけしからんということなんです。

野嶋(司会) それは大学の中のことでですか。

上田 大学の中のある一部の非常に強力な反対というのがありましてですね。これは、百審で決まった後まで捨てぜりふを述べられた委員の方もいらっしゃるくらいに非常に強い反対があったんです。ですから私の意識の中では、スポーツ科学というのは今の人間科学をそのままスポーツ科学に入れかえてもちっとも矛盾がないくらいなんですけれどもね。

野嶋(司会) それは、こういうことですか、先生、スポーツ科学がほかの生命科学とか健康科学、当然健康科学は親戚関係みたいなものだから融合していくということ自身も何の違和感もないと。

上田 ただ、さっき言いましたように、やはりスポーツ科学の方は実技を伴う部分というのがね、身体表現の部分をどういうふうにきちんと特色を出していくかという問題が残りますが。

野嶋(司会) それは例えば学科に参加する学生の全員に求められることですか。

上田 いや、そんなことはないです。これについては、研究者養成の部分と、教員養成の部分と、スポーツそのものをやる部分と、いわれるコース制を山崎先生は提案してられますけれども、これはもともとそういう形だったんですよね。です

から、全員研究者である必要もこの学部はないし、といって、全員がスポーツ選手である必要もない。だから、それをどういうふうにきちんと整理するかというのが知恵だろうと思っているんですけれどもね。

野嶋(司会) 全くそう思いますね。いろんな目的をもった学生が集まる、つまりスポーツ科学そのものに関心があって参加する学生がいてもここに参加し得る。そういう学科でもあると思いますし。

相馬 だから、その辺がうまくまだスポーツ科学科では確立されていないから、そういう意味での混乱はあると思う。要するに、スポーツ科学はスポーツ選手養成にどういうふうな形でドッキングしているのかとか、その辺の部分がまだ。多分これからつくっていくところだろうと思う。

野嶋(司会) ただ、上田先生のおっしゃっていることと、私が日常接している2~3の先生のおっしゃっていることが必ずしも同じじゃないような気がするんですけど。

上田 それは少なくともスポーツ選手あるいは体育教師の養成というより、それ以外の部分を非常に強調されるからじゃないですか。だけれども、2つのことは常にあるわけですよね。健康のための手段としての身体活動という部分と、それから価値そのものの追求過程としての身体活動としてのスポーツ。これはどこまでどう線引きするかというのは非常に難しいですけれども、やはり力点の置き方は違ってくと思います。体専の先生方の中でもスポーツ選手、あるいは体専そのものが大学の運動部強化の目的を持ってつくられたという意味で、体育学部をつくるという要求には早稲田スポーツの強化ということが常について回るわけですね。

その目標と、それに対する反対というのがありまして、私のところへそんなスポーツ選手ばかりつくるような学部なんて困るぞと。それで、私はそうじゃないでしょうと。スポーツというのは、これからのいろいろな意味で健康生活を維持増進するためにもスポーツを活用できる部分があるということで、私自身の考え得る中では、むしろ健康スポーツというのは後で足したものなんですけ

れども、全体としてはやっぱりそれは一体として見ておかなければいけないだろうと思いますよね。ですから、あとの健康づくりということと、相馬先生の健康科学科でやられるようなアプローチの仕方もありますけれども、実際の身体運動を通じた健康へのアプローチというのもあっていいだろう。ディシプリンはスポーツ科学科でやろうということで、あれは応用部門を2つに分けたんですよね。

相馬 応用と言っていていいかどうかかわからないけど、要するに設置審の質問のときに言われたのは、あなたたちは基礎を基礎と考えていますかと上田さんと私は言われた。基礎科学科をあなたたちは健康とスポーツの基礎だと思っていらっしゃるすかと言われたんだ。

大島 浅井先生も書いておられるけれども、やっぱり健康科学とスポーツ科学は実践の学問であると。それから人間基礎は基礎科学にあるというふうな答弁をしていたわけですよ。

相馬 そうしたら、そう思っていますからと言うから、僕はちょっと首をかしげていたら、「そうでしょう」と向こうが言ったんだ（笑）。

野嶋（司会） しかし、ディシプリン自身というのは既存の学問が学問として存在している限りにおいてすべて固有に内包していると考ええると、基礎というのはそのディシプリンを大事に守っている立場であってディシプリンの融合をめざす人の集合が健康とかスポーツであると……。

相馬 いやいや、僕はそうじゃなくて、10年のスパンで見ると、20年のスパンで見ると、30年のスパンで見るとということだと思うんですね。今、基礎でおやりになっているというのは非常にいろんな部分での芽があるわけです。例えばエイジングの問題をとったって、エイジングは社会学だけの問題ではないし、方々へ広がっていく問題だし、それからホルモンの問題でも脳神経だけの問題でもない。これはやがてそれこそ生命科学というような形で健康とか何かにもずうっと広がってくる問題。だけど、今やっていることは広がっている部分もあるけれども、それぞれの専門領域を一応今伸ばしている。だから10年のところでパサッと切っちゃったら、これは何もならないので。要す

るに何年のスパンで考えて、どう持っていくか。だから、これは早くできるインターディシプリナリーなところもあるし、それからゆっくり行って、最後にトータルでそういうふうになれるところもあると、僕はそういう発想なんだけどね。

大島 相馬先生の言うのはまさにそのとおりだと思うんだけど、僕も非常にロングタームで考えなきゃならない。どれだけそれを意識してやっているかということ、皆さんがやってくださるかということがやっぱりそれにつながってくる問題で。

野嶋（司会） その意識というのは融合ですか。

大島 いや、目標を持って、高いところにする。最初、基礎の学科主任をやったときによく最初にこういうことを言った。人間科学とそれぞれの専門の先生方のやられている専門とどうつながってくるのか、1日5分でもいいから10分でもいいから考えてもらえないかと。そういう意識を持つことがやっぱり僕は非常に大事なことだと思います。

相馬 だから、そういう意味でカリキュラムが今度の場合は非常に融合性を持ってきたというのは、10年のところで一つそういう方向がまた少し芽が出てきたということになるかなと。

野嶋（司会） 設置審に提案した段階のもとに戻りつつある。

相馬 もとに戻るといっても、融合というような方向に向かって少しずつ出ていくというのか。

野嶋（司会） つまり、スタートを10年前としますと、融合に向けて動き出していると。

相馬 そうそう、よりね。最初からもっとそうしたかったのができなかった部分があるけど。

野嶋（司会） 私は、人間科学の特徴というのは、例えば基礎と言いましても、さっき相馬先生がおっしゃったように、ロングタームで見ていて当然どこかで融合が生じる。そのときでも、実は基礎と融合との行き来を内部で持っていないとだめだと思うんですね。本来、そんなことを言うては失礼ですけど、文学部の心理学教室なんて余りそういうことを意識しないでやっていますけれども、例えばここに人たちが、人間工学をやっている人にしろ、私なんかにはしろ、明らかなアブ

リケーションというか、開発研究をやっていますでしょう。開発研究をやっていると確実に基礎がだめなのがよくわかるんですよ。そうすると基礎をやらざるを得ないんですね。やはりリサイクルといいたいでしょうか、このループしているところをやるのが人間科学部の実は特徴じゃないかなと。そういうところが非常に大事なところのような気がするんですね。アプリケーションしながら、実はルーツを、あるいは基礎を考えるというか、基礎を考えながら、アプリケーションをその視野の中に入れていいたいでしょうかね。

浅井 よく健康科学科へ来る学生が、すぐに私は臨床心理をやりたい、カウンセラーになりたい式でしょう。だけど、今の心理臨床の連中なんかも、枠をきっちり、昔の心理学をやっておいてもらわないことには役に立ちませんねということを言うわけですよ。それと同じで、どこまでが基礎とかどこまでが何とかというのはないと思うんですね。

野嶋(司会) 多分両方じゃないかと僕は思うんですね。

相馬 それはだから世間一般はまだ昔流の考え方をしているから。要するに、新しい学部が最近是非常にいろいろできてきたけれども、従来の旧態依然たるものがほとんどの大学がそうですから、それが大学のイメージとしてはそうなるだろうと思います。だから、それを変えていくためには、結局我々の卒業生がどう活躍していくかという問題にも大きく絡んでくるので、その部分が5年や6年のあれで見ていたんじゃ、やっぱりそううまくはいかない。

大島 でも、やはり学問というのは一つは基礎科学ありきなんですね。それからもう一つは戦略研究があります。戦術研究があります。マルチディシプリンな学問というのは、その3つが常に協同しないと実はいけないんじゃないか。

野嶋(司会) 基礎研究と、戦術研究……。

大島 基礎研究と、戦略研究と、戦術研究です。スポーツ選手を育てるなんていうのはまさに戦術研究なんですよ。

野嶋(司会) 先生、戦略と戦術はどういうふうに分けられますか。

大島 戦略はいわゆる政策を立てるために役立つ。基礎はそのまま政策には役に立たないわけです。それをつなげるのが戦略研究なんですね。それからもうちょっと実践的な、例えばスポーツ選手を育てるなんていうのは戦術研究なんですよ。

濱口 大島先生、実は相馬先生も今おっしゃったことなんですけれども、「ヒューマンサイエンス」という人総研の方の雑誌がありますよね。あそこで座談会をやったんですよ。私もそれに出て聞いていると、助手が主だった出席者で、人間科学部を卒業した助手と、それからそうでないところから着任している助手がいるでしょう。彼らの発言を聞いていると、人間科学部出身の助手とそうでない助手の発言は明らかに違う。

春木 私も驚いたし、感激しましたね。人間科学部でやっていけるんだと言うんですよ。

大島 僕は、ここで育った人がここの教員になったときに初めてここの人間科学が本当の意味ででき上がってくるんだろうという気が前からしているんだけど。

濱口 もうしばらくですね。

浅井 いや、世の中もだんだん生涯発達なんてことを言っているわけだけれども、例えば今、成人病と言わないでしょう。生活習慣病ですか。あれなんかは完全に時期を分けているんじゃないんですよ。ずうっと子供というか、青年時代にどういうふうに生活していったかが病気になるならないということでしょう。そういう意図に少しずつ変わりつつあるんじゃないかなと思ったですよ。

大島 そうですね。

学科増設、学部増設の問題

相馬 だから、ここで出した生涯発達とライフステージにおける健康維持増進というようなものというのは、非常に僕は間違っていない考え方だろうと思います。

それからもう一つ、ちょっと私は、将来これからのことで起こり得るだろうということを一応考えておいた方がいいだろうというのがありますが、それは、この学部は一学年の人数が550人なんですよ。ある見方をしますと面積の割合に学生数が非常に少ない。これは将来的に受験生が減って

くる。そうすると学生はどうしても確保しなきゃいけない。もう一つは臨定、臨時定員増がもう数年で切れるんですよ。それで今、早稲田の場合は臨定が600なんですけど、半分は定員に組み込むという形で臨定の廃止を、決着を大体つける方向で動いている。

野嶋(司会) 半分は切っちゃうということですか。

相馬 ええ、減るということ。そうすると、その300をどこへ持っていくかという問題というのはやがて起きてくるわけです。そうすると一つねられる可能性があるのは人科だと。

浅井 ここへ持ってきちゃうわけです。

相馬 持ってきちゃう。だから、そうするとそのときに出てくるのは学科増設という問題が一つ出てくるわけです。要するに、そのときにどう対処していくのかということぐらい、まだしばらくは来ないと思うけれども、そういう事態は起こらないと思うけれども、何かそういう事態が起こる可能性はあるんだと。

上田 その点に関しては、よくSFCとここを引き合いに出されますけれども、私は今でも2学部でここをつくっておいた方がよかったと思っています。人間科学そのものは私は非常に意味があると思ったから、浅井先生を説得してでも人間科学部をつくってくださいとお願いした。それと、実践を伴うスポーツ科学はやっぱりちょっとはみ出している部分があるから、それで単科大学みたいな形で、私はよく言うんですけども、所沢の場合は田舎の単科大学みたいになっちゃっている部分があるんですよね。1学部で、学生数が少ない。ホームキャンパスとの交流が非常に制限されている。だから、せめて2学部それぞれある程度……。

相馬 ただ、学部増はかなり大変なまた面倒くさい問題が出てくるだろうと思うんだ。これは4～5年とか数年、僕なんかはいなくなっているからいいんだけど、数年後に学部というのはしばらくこのところ無理だろうと。だれがやっても、今の総長が代わったとしても学部増というのはなかなか無理だろうと思うんです。そうすると、もし話が出てくると学科増だろうと思う。スポーツ

科学科の大先輩や何かが、僕に言わせると、50億なり100億なり集めれば学部というのが1つできるだろうと思うんだけどね。

濱口 上田先生、話をちょっと戻しますけど、先ほど大島先生が基礎と戦略と戦術と言いましたね。戦術というところで、体育局の先生方がやがてこちらに移行した。先生はもともと体育局の附属だったけれども、ずうっと当初から新学部構想に加わってましたから前後の事情を全部ご存じなわけです。この座談会は過去を語っている部分なので、そここのところをもうちょっと触れていただけたらと思うんですが。

上田 これは計画委員会で、評議員会で決めたときは2学部をつくるということだったですから、体育局は解消して、全員を学部の中に取り込むということだったわけです。そういうことで先生方は合意されたわけですよ。ところが、それがそうはいかなくなった。そしてそのときに、じゃ、最初から全部移せばいいではないかということがひとつ議論になったんですけども、これは全く大学の事情がありまして、一気に全員体育局から移せなかったわけです。

これは浅井先生の方が詳しくご存じではないかと思いますが、体育局を移しますと、大学の各学部の教養課程の全部が影響してくるんですね。そうすると、各学部の教養課程の教員の審査ということまで波及する可能性があったんです。それで、体育局の組織はつぶさずに、ですから極端に言うところ、あそこはだれか一人専任教員を残せばよかったのかもしれないんですけども、ところが、そうするわけにはいかないし、実際の運用上そうはいきませんので、あれは2段階に分けたといういきさつがあるんです。ですから、体育局の先生方は当然自分らも学部へ移るという認識でおられた。ですから賛成の判子も押されたと思っております。今でもそうおっしゃる方はいらっしゃいますから。ところが、2段階移転ということになった。

体育局には勤務条件に関する問題が2つありました。一つは、語学担当教員と実技担当教員の時間外手当支給基準時間の問題でした。これは教員組合の努力で解決しました。しかし、もう一つの定年格差の問題は55歳から65歳に延長されました

が、格差を撤廃するところまではいきませんでした。その後100周年記念事業として体育・スポーツ系学部を設置が決まると、理事会は体育局の実技担当教員も学部所属になれば定年問題は解決するという立場をとるようになりました。これが体育局本属の教員が全員人間科学部に移転することになった理由の一つだったと思います。

相馬 結局、全部ひっかかっているのが文部省の申請なんですよ。一番僕も苦労したのは人間の審査のときだったので、それから人間をどうやって持ってきて、どこでどう対応していくかということで、結局そこところは物すごく安全度をかけて出していくわけですよ。出して落っこってしまったら、その人はどうするのということになっちゃうわけ。特に現職の人たちは。そうすると、どうするのといってどこにも行くところがなくなってしまうと困っちゃうので、だからその辺はかなりクリアにカットして、それで申請をするというのは学内的にもやったし、学外的にもやったということは事実なんですよ。だから、その部分はどうしても尾を引くというか、そういうことはあり得たということで、その辺が一番面倒くさいところだったんでしょうね。

上田 今おっしゃったのと、もう一つは各学部の教養課程が全部影響を受けたんです。

相馬 だから、そういう学部はくっつけちゃってもよかったんですよ。だって、それはもうでき上がっている学部だから、転属で済んじゃったんだから。

上田 転属というよりも、教養課程の教員の審査というのは……。

相馬 いや、だからそれはもう持っているんだから、そのまま各学部に行っちゃえば、それで終わりになっちゃう。

上田 いや、体育の先生方じゃないんです。ほかの問題も動く可能性が心配されたんです。

相馬 いや、でも体育局の先生を動かすだけだったら、大したことなかったんじゃないですか。だけど、向こうの学部がうんと言うかどうかは別としてね。

上田 いいや、そうじゃなくて、ほかの学部に入れるのではなくて、あそこは体育局の教員を全

部こっちへ出してしまいますと、各学部の教養課程の審査という問題に波及するおそれがあったんです。ですから、体育局の問題じゃなくて各学部の問題です。

浅井 違法的というか、異常なんですよ。ああいうやり方は早稲田だけでしょう。つまり集めちゃって。体育もみんな本当はそれぞれの学部にも所属すべきものですよ。ところが、昔やったことでずうっとそのまま来ちゃっているから、文部省も今さらそんなのはだめですとも言えないまま来ている。それで、そのおそれというのは、何か既存の学部にもう一度きちんとしてしまうと、既存の教養までひっかかってくるおそれがあったんじゃないかというふうなことを、それはよく知らないけど、上田先生は心配したと。

野嶋(司会) 正しい方向に戻すと、それが原因で何かまずくなる。

相馬 でも、その辺はどうだったかよくわからないんだよね。

浅井 わからなくなっちゃったんだ。

上田 これは設置審に出してみないと、さっき先生方がおっしゃっていたように、文部省は何考えているかわかりませんから、そのときの担当官の考え次第で。

相馬 ただ、履歴書を見た限りは非常にきつい部分というのは、これは厳然たる事実だからしょうがないと、それはそうだったんですよ。だから、そういう部分を簡単に言えば抱え込んでいてどう処置するかという問題が非常に苦労をしたところだと思うんです。

浅井 認可になったら、もう翌日に全部人間科学部へ移せますなんていうようなことをある人は体育局の先生を集めて言ったんですよ。実際はそんなことはできっこない。少なくとも4年間は。

相馬 ですから、やっぱり何かつくるときというのはどうしても被害を受けていると言っては申しわけないんだけど、どうしても被害を受けちゃう先生が出てきてね。

浅井 全く何もないところならね。

上田 特にスポーツ科学科の場合は体専と体育局両方だったから。

浅井 ちょっと性質が違う2つがあるんですよ。

上田 それと、今度は学科として成立するためには不足している専門がありますから、それは外から連れてこなければいけない。そういう幾つかの問題を抱えながらやるわけですから、非常に思いどおりにならない。体専が反対しても、体育局が反対しても、新学部はできないんですから。

相馬 まあ、できなかったことはないんだけどね。だからそこは相身互いみたいところがあって、両方でうまく妥協してやったところに……。例えばスポーツ科学というのをある発想の中では、スポーツ科学は最初から学部で独立してつくりたいと言っているんだから、この学部ではやめてもいいんじゃないかという発想だってあるわけよね。だけど、それはそこで一緒に取り込んでいかないとそれはできないという形で、こっち側のある部分はそこで妥協しているし、スポーツ科学科の方でもそれはその分妥協している部分があるわけで、それがなくなるとこういうものはできないんだよね。両方で突っ張っちゃったらね。

野嶋(司会) しかし、方向としては、明らかにこれからより融合する方向に行くんじゃないでしょうかね。そうすると、相馬先生のおっしゃっていたような、本当はスポーツ学部ができるんだったらその方がいいとかと思っていらっしゃるかもしれないんですけど、必ずしもそうじゃなくて、本当にもうインテグレートする方向に行く可能性が結構強いんじゃないでしょうか。

相馬 要するにこういうものというのはやっぱり時期とかチャンスがあると思うんですよね。それでその時を逃さないで——というのは、その逃さないためには、その前にどれだけそういう方向でいろんなことができ上がっているかということが一つの前提条件だった。

野嶋(司会) 例えば、人間環境学部の構想みたいなものも最初あって、つぶれはしたけれども、そういうのがどこかで生きてきたように、考えてみる必要があるということでしょうか。

相馬 というより、スポーツ科学部をもしつくるということを念頭に入れていくんだったらば、そのことのためにもいろんなことができ上がっていないと。

野嶋(司会) だったら、必要条件を今のうちに

整備するとか。

上田 今人事の話が出て、これはどこかで終わるためにけりをつけておきますけれども、体育局は助手になってから大学院に出たのがいっぱいいるわけですね。これは研究業績がどうしても必要だった。ですから、そういう学部をつくるときの審査に耐える業績をつくるためには、大学院に行き、それできちんとした研究者になり得る人をずっと準備してきたということですよ。ですから、実技の先生方でも若い方たちはほとんど大学院を出ておられる。そういうことで、人事もずうっと長い目を見て、用意して業績を積んでおいたということはあるんですね。

野嶋(司会) これは、私立の大学だけでなく、国立大学もどこも全部設置審との悪戦苦闘はある。

大島 だけれども、10年前に比べて今の方が設置審はルーズになっていますから通りやすいでしょうね。まあかなり幅が広がってきて、どんな構想でも割合にすんなり通すという傾向になってきているから。

相馬 そうですね。最近はどう。

上田 今の方がそういう意味では楽になったですね。

大学院設置の経緯

浅井 ここの学部は、そういうふうに関内的に見たときに学部はもう紆余曲折で来たわけでしょう。大学院のときには学的にはその前の段階で初めから大学院まで行っちゃうよということで百審を通してあるから。

上田 つくるのを条件にして学部をつくったんですから。

浅井 あのときにもう一度大学院を改めてなんて言ったら、また反対だ何だかんだと言うでしょうね。ところが、先にもうこれは大学院までやるんですという式で百審を通してあるから。

濱口 その大学院も初めは1学科制を構想していたんじゃないの。それが2つに分かれたとか、そうでもないんですか。

相馬 一番基本的には3専攻つくりたかったわけですよ。というのは、従来の考え方でいくと、

学科の上に大体のるという発想なんですけど、これもまた人間の問題で、要するに通るか通らないかという発想になるわけです。

上田 出してみなきゃわからないということで、非常に防衛的になった。

濱口 1学科制度というのはもともと考えなかったんですか。人間科学研究科なら人間科学研究科だけとか。

相馬 それは考えなかった。

野嶋(司会) 1学科という大学院は存在し得るんですか。

春木 それはだめだと聞いたな。

相馬 最初はだめだったんですよ。それで、たしか最低2専攻ないといけないとかなんとかという話だった。しょうがないから、本当は3専攻あれば一番いいんだけど、2専攻になった。

上田 これは、早稲田大学大学院の問題も一部出てきておりますけれども、スポーツの関係だったらマスターレベルであれば、もっと定員をずっとふやしても多分受験生はいるだろうと思います。授業料の問題があるから、最近はきついかもしれませんけれども。

相馬 授業料の問題というより、またもう一つこれは定員でべらぼうに苦労したんだよ。

浅井 そうですね。苦労しましたね。

相馬 本当は120人で出したかったんですよ。ところが、こんな多いのはないと。出してくるのは4~5人しか出してこないんだ。こういう例、こういう例と言って出してくるのは。

相馬 それで、そのときにしょうがないというので、間をとって100と言ったんだけど、まだと言うから、それでもう70、これはもう譲歩できないと思って、そこで頑張ったわけです。

野嶋(司会) それが70。

上田 学内でも大学院の定数をふやすのは余り賛成しない学部もありますしね。

大島 特に国立なんかの場合は、定員に足りないと非常にうるさいみたいです。定員オーバーの方が文部省はオーケー。

野嶋(司会) 定員が足りない場合の方が文部省の指導はきついですよ。

春木 予算の問題かな。

相馬 それと、やっぱり何かあともう10年ぐらいたつと再編ということが起こり得るかもしれないね。

野嶋(司会) この学部のことですか。それとも、もっと広い意味で。

相馬 学部も、大学院も含めてね。というのは、やってみて、さっき大島先生や浅井先生が言われたようなことがうまくいかないだとすると、それはどこに欠点があるのかということをやはり検討してみる必要があるのではないかと。そうすると、例えばより融合とか、インターディシプリナリーな研究がしやすい体制というのは、大学院の場合は特にそうだろうと思うんですが、どういう形式がいいのかという問題がやがて出てくるだろうと思う。

春木 やがてじゃなくて、もう近いと思うよ。大学院の編成というのも、私は委員長をやっているけれども、私の時代にはもちろん手をつけられないと思うんだけど、次ぐらいに、つまり10周年ぐらいにやっぱり問題になるんじゃないか。カリキュラムはいじりますけど、やはりもう融合の方向ですよ。今まで2専攻で科目を分けていたけれど、今度はもう1つで、どちらの専攻の科目をとってもいいという感じにしましたので、大学院の組織も多分近い将来いじることになるんじゃないかな。

だから、学部もそうですし、ある意味においては、総合人間科学というか、学際的というか、その方向というのは最初我々は考えていたわけですけど、それで私もヒューマンサイエンスに論文を書いて、題目を“態度”としたんですよ。人間科学を定義できなかったから。ただ、人間科学という理念を持つとよと。とりあえず理念を共有して、いずれ将来はその成果を待とうということで出発したわけですよ。だからある意味においては、それを文部省にガーッとやられて3本線を引かれるとかいろいろ修正を受けたいけれど、またここへ来て意外と最初の思いの方向に行っているのかなと思う。

将来に向って残された課題

野嶋(司会) 人間科学部みたいなのは他の大学

にもどんどんきつつありますから、そういう意味で常に競争しながら、より正当派の人間科学を目指しての少しずつの改変というんでしょうか、それを伴いながら生きていくというのは仕方ないと思いますね、僕は。

相馬 でも、正当であるかどうかはわからないからね。だから、ここなりにどういう発想で、どういう方向で持っていこうかということがむしろ重要なので。

上田 そういような方向でつくったんですけども、私、今はもう10年たって少し気になってきているのは、はからずも大島先生が生物・心理・社会、6・6・6とおっしゃった。これが親学問の方の政略関係というのがどうも私最近気になってしょうがない。

大島 それはどう気になりかけているんですか。

春木 多分こういうことを言いたいんだろうと思うんです。例えば基礎科学科も最初は学科で発表会をやったんですよ。生物学、心理学、社会学とやったんですよ。一通り終わって、基礎科の中で発表するのはそれで終わっちゃったのね。実は終わったままで今まで来ちゃって、ある意味においてだんだん自分のタコ壺へ入るというか、そういう傾向にやっぱり今来ちゃっているような感じがするんだ。それを多分危ないと言っていることだろうと思うんですよ。

それで改めて思ったのは、この間ちょっと心理で集まって、新しく来た方が、どうしてもっと科なりあるいは心理の中だけでもそういう集まりをやらないのかと言われて、改めて新鮮な思いをしたんですよ。基礎科でそういう話し合いをすれば、学問の発表でもいいんですけども。改めてああそうだったんだという思いをしたんですよ。だから、今回の新カリキュラムでそういう方向に進んでいると思うけれど、一人一人の動きというものをもう少しダイナミックにしていくということが必要だろうと思う。

大島 だから、どこでそれをやっていけるのかなというね、そういうことを意識している人たちがもっとやる。

野嶋(司会) 誰かが音頭をとって、例えば科研のプロジェクトなんかを出すときに、意識的にそ

のメンバーを集めたかなり大きなものを出すとか、こういう試みはやっていないでしょう。これはやろうと思えばできることだと思いますよ。みんなが参加できるテーマで。

春木 だから、人の動きでのダイナミックスというか、融合というか、これがやっぱり必要です。だけど、非常にしんどいんだよね。

野嶋(司会) やっぱり春木先生とか相馬先生みたいな人が音頭をとってですね。

春木 いや、もう我々は古いよ。やるのは若い人だ。

野嶋(司会) とにかく1人でしゃべると5人前ぐらいの人がやっぱり発言しないと(笑)。

濱口 今、大学院の話が出て、そうすると総合の話は理念としてあるんだけど、実際なかなかそのようには動かないんですよ。けれども、人間総合研究センターはそのことを日常的に志向しているんだけど、それでもやはりそういう傾向がなきにしもあらずのようです。この点について所長の嵯峨座先生は、人間総合研究センターについてはどういうふうにお考えなのか伺ってみたいです。

相馬 例の人間総合研究センターのプロジェクトというのをもう一遍考え直す必要があるかもしれないですね。それでなるべく多方面から参加をもう一遍再編成するというようなことが一つ。それで、人総研も科研費とか何かは出せますからね。ですから、むしろそういうところでもひとつ出してみるといようなことをやったらいい。

嵯峨座 ある種のよく集まる研究者集団みたいなものをうまくつくる必要はありますね。割りかし付き合いやすい塊ってあると思うんですよ。それはまだ育てていないですね。

相馬 それはなかなか難しい。難しいというのは、総合研究をやってみると大体よくわかるけれども、総合研究の人たちが、やっぱり自分の割り当てだけしかやらないんだよね。

野嶋(司会) みんな小さなグループに分かれますから。

相馬 そうそう。それをみんなでディスカッションしてまとめていくという作業がなかなかとれない。だから、そういうことをやはりやらなきゃ

いけない。

春木 何かその方策がここであるといいんだけどね。

大島 総合研究の場合に、そのテーマに対してどれだけ基本的な問題意識を持っているかということ、その問題意識を責任者がどれだけしっかり出すかということが、これがまさに決め手だと思うんだけどな。

相馬 だけど、それがなかなか大変なんだ。責任者を引っ張り出すことが非常に大変。

浅井 研究員の配分まではいくんだけど。

野嶋(司会) 確かにそうですね。あとは運用ですね。

嵯峨座 そのプロジェクトのあり方を人総研も考えなきゃいかんと思うんですね。プロジェクトとは何かというと、今は一つのテーマで同じような分野の人が集まって研究をするということになっている。私が最近考えているのは、そういう研究の共同性というのはもちろん必要だけど、それだけをいつもねらうんじゃなくて、研究者集団ということを考えているんです。一つのことをやりながら、分野はいろいろ違って、研究もばらばらでもいいから、何か共通の場が持てるような研究者集団が形成されればと思います。これは若い助手なんかの人たちがそういう仲間グループをつくっていただいて、そこでやっていくと割にいいんじゃないか。そういうやり方ももう一つ考えてみたいというふうに思いますけどね。

相馬 特に背景が非常にがっちりして狭いタコ壺に入っちゃっている人を集めてもしょうがないから、逆な言い方すると、もう少しさっき濱口先生が言ったような人科を出たような考え方を持っている人たちが集まってくるとか、いろんなやり方はあるだろうと思う。

嵯峨座 そう。

野嶋(司会) 我田引水になるかもしれませんが、情報環境というのは物すごくこの学部の中で変化したものだと思います。あの中などでは、例えば数学とか生態学の専門だった人が例えば教育学で論文を書いて、結局大学に戻ってきているとか、そういう例がもう既に出始めているんですね。恐らくこのキャンパスから育ってく

る人たちが何かを実現してくれるんでしょうね。我々は変わりようもないのかもしれませんが(笑)。

相馬 若い人たちに期待するわけだ。

嵯峨座 それで、人総研の場合にはもう一つ、学科レベルでの交流というのは、学科の場合はシステム化していますからなかなか難しい面もあるので、人総研は実験ができるということを生かさないかというふうに思うんですね。だめならパッとやめればいいじゃないかと。いろいろなやり方を若い人を中心にやる。

相馬 科研費でいえば、先端研究、萌芽の研究とか、ああいうものを逆に言うと育てるといいかもしれないですね。

嵯峨座 そういうのを考えていきたいというふうに思っていますね。

野嶋(司会) そうですね。可能性としては人総研を足場としていろいろ手をつけるところはある。

大島 基本的には、最初に出されていたタコ壺に入らないということが、非常に大事なことだと思うんだけど。もうちょっと周りに野次馬根性を持っていいんじゃないか。

相馬 これから私が野次馬になりますから(笑)。これからは何もしないで野次馬になって、火事場見物みたいなものだな。

野嶋(司会) そんなふうにはさせてくれないんじゃないかと思っているんですけども。

大変興味深いお話で、まだまだお聞きしたいことはたくさんあるのですが、時間が来てしまったようです。最後に何かこれだけはというお話を承っておきたいと思います。

大島 一つだけ、ちょっとこれはできたときからひとつ心配しているんだけど、個のウエルフェア、個の人間科学の研究がやはり強過ぎて、集団と個という場合にはウエルフェアの利害が相対立する場合があるわけね。個がよすぎると、集団全体に悪い影響を及ぼしてくる。浅井先生のシエマでいくと横の糸なんですよ。そういう横の糸をもうちょっと考えてやる必要があるなという感じをいまだに僕は持っていますね。

野嶋(司会) 例えば総合講座とかありますね。ああいうような形の……。

大島 ですから、それが個の人間のウェルフェアなんですよね。

相馬 だけど、それは社会学やなんかの今やられているエイジングとか。

大島 ええ、エイジングなんかでその芽はあるんですけど、やっぱり全体として弱いなという感じがあるんです。

相馬 それから、我々がやっているあれでも、やっぱり社会環境的なものの健康に関するシステムみたいな、そういうようなこともあります。

野嶋(司会) わかりますよ。例えば私のところへ今研修生で来ている飯能高校の先生は、私のところのサーバーに自分たちのニュースグループを立てて、私のところのサーバーを利用しながら、実は地域の高校の理科の先生を結集して環境教育をやろうとしているんですね。単に人間科学部のサーバーを借りているだけじゃなくて、多分生命系の先生方をねらっていると思うんですけど、その先生方の知をインターネットを介して地域にちらばる高校生との質疑応答の環境を形成していく、そういうふうに今インターネットを使いますと、むしろ個だけじゃできない……。

大島 いや、個人がどうあるべきかという人間の問いかけじゃなくて、やはり人間は集団として生活しているわけね。

野嶋(司会) ええ。ですから、それなんかはもう完全に自分の力だけではない他の人の知も自分の知の中に取り込むような形。

大島 集団全体としてどうなるかということは。

相馬 それはちょっと視点が違う。あなたの場合は個を最初にやっているんだけど、個が集まるという発想なんだけど、そうじゃなくて、よくわからないけど、集まった集団そのものの例えば健康なら健康というようなことはどういうことなのかというような……。

野嶋(司会) 集団の健康ですか。

相馬 そうそう。集団全体を考えたときの健康というようなこと。まあ社会学なんかではしょっちゅういろんなことをおやりになっている部分があるので、例えばエイジングの問題なんていうのは、完全に社会のシステムの中でどういう形でその高齢者というものを扱っていったら、あの考え方

としては簡単に言えば健康維持とか何かができるかということまで広がっていますよね。

野嶋(司会) いや、ですから私が言ったような事例を知の共同体というような言い方で言っている人たちもいますけど、だからとらえ方としてはマスですよ、グループですよ。

濱口 きょうの座談会の中で、今おっしゃった知の共同体、あるいは嵯峨座先生の学者集団、あるいは研究者集団ですね、それを COE(center of excellence)という、そうものに育て上げていくような努力をこれから人間科学部がやって、他の学部とああ違うなという、そういう方向を積極的に目指したいと思うんですよ。

もう一つの部分がきょうの座談会でもうちょっと足りないかなと思うのは、これは上田先生、体育局のことについてももう少し座談会の記事につけ加えていただければ私はありがたいと思う。というのは、大島先生の言葉をかりて言うと、基礎と戦略と戦術。戦術の部分は、先生のお言葉の中にも強ければいいんだという言い方で出ているんじゃないでしょう。一方では強ければいいんだけれども、他方では融合ということで考えてみると基礎と戦略と戦術でしょう。そこのところをどういうふうに考えておくといいのかなということです。先生がその部分で言い足らなかった部分を補足的な意味で。

上田 そこのところはちょっと難しいんですよ。難しいから言わなかった。

浅井 いや、難しいということは大事なことですよ(笑)。

野嶋(司会) それでは、その点の一つ上田先生のお仕事としてお願いすることにしまして、きょうはこれで終わりにしたいと思います。

本日は貴重なお時間を割いていただき本当にありがとうございました。ともすれば消え失せてしまう人間科学部創設時の先生方の気概と御苦勞を賜ったと思っています。